

平成22年度第2回千葉市史編さん会議議事録

- 1 日 時：平成23年2月2日（水） 午後1時30分～3時30分
- 2 場 所：郷土博物館 講座室
- 3 出席者：（委員）
吉田会長、野村副会長、今井委員、白井委員、本郷委員
（千葉市史編集委員会代表）三浦茂一委員長
（事務局）
古川生涯学習振興課主幹
倉田郷土博物館館長、殿塚副館長、若菜学芸係長、
築瀬副主査、市史非常勤職員笹川、非常勤嘱託職員大関（記録係）

4 議 題

- (1) 平成22年度事業報告
- (2) 今後の事業予定について
- (3) その他

5 議事の概要

- (1) 平成22年度事業報告
本年度実施した史料収集調査・整理事業、刊行事業（『千葉いまむかし』No.24 及びバックナンバーの一部HPへのUp）、普及事業（市史研究講座・各古文書講座・展示関係・ニューズレターの発行）、市史研究会などの研究事業、市史協力員の活動について報告、承認された。
- (2) 今後の事業予定について
来年度の普及事業・今後予定される刊行物の刊行事業（『史料編 近現代』・『歴史読本』・『千葉市史料』）について説明。事業予定計画については今後編さん会議での議題の出し方及び時期などについての要望が為された。
- (3) その他

6 会議経過

午後1時30分、委員6名中5名着席。安田委員は欠席。

司会（殿塚副館長）より、資料確認に続いて設置条例第5条第2項の規定により、この会議の成立が告げられ開会。

古川生涯学習振興課主幹の挨拶、吉田会長の挨拶に続いて、会長が議長となり議事に入った。

議題1 平成22年度事業報告

平成22年度の市史編さん関係の事業について、史料調査収集・整理事業、『史料編

近現代』関係調査について、市史等の刊行事業、市史編さん普及事業、市史研究事業、市史協力員の活動の6つに分けて若菜係長より説明。

<質疑応答>

吉田会長：多岐にわたるが、順に議論したい。まず1の史料調査収集・整理事業について、史料編9関連史料群よりリスト作成とあるが、具体的に説明を。

事務局（大関）：江戸時代から明治初期ぐらいで、『史料編9』刊行の際に使った史料群から、流通関係や文化など、江戸と千葉との関係が少しでも見える史料をピックアップしている。「江戸と千葉」研究会とリンクさせられればと思ったが、現状では内容は多岐にわたり、具体的に提示できない。馬加に残る「往還御用留」など人の流れがつかめる史料がある。現在はリスト内容にチェックをかけている。

白井委員：かなり新規の史料を入れているようだが、これまでも史料収集が難しい状態と聞いているのに、新しく収集して保管はどうするつもりなのか。これから近代編を刊行することになれば、更に史料は増えると思うが、収集の見込みはどうなっているのか。

事務局（若菜）：新規に入る史料のうちひとつは、千葉県立中央図書館で前半部分を所蔵しているため、今後そちらへ収集することも含め相談する。利用者の便を考えれば、史料は集中していた方がよい。収蔵庫については具体的に内容を見直したうえで、スペースを有効活用できるようにしたい。近現代史料は、入ってきた段階で取捨選択する必要がある。出来る範囲で体制を整えておきたい。

事務局（倉田）：現在収蔵庫に、あまり温度・湿度に影響されない資料も入っている。それを移し、新規受け入れ史料を空いたスペースに収蔵したいと考えている。その見直しを今年度中に実施し、対応したい。また、先ほど述べたように他の施設との話もさせていただいている。内容的に当館で持っているべき史料もあると思うので、その点についてはその都度検討しながら進めていきたい。

野村副会長：矢作の加藤氏収集資料や新井氏の写真は大変貴重であり、後世で大事になってくるものだと思う。例えば加藤氏の収集のきっかけなど調べて、寄贈されたことや、企画展に付随して新井氏の写真が寄贈されたことを、市の広報や新聞などで一般に周知してはどうか。貴重な資料が捨てられず集まってくるかもしれない。収蔵スペースの問題はあるが、その活動も併せて行った方がよい。失われる資料をいかに集めておくか、予算が無い時にはそうした活動をしたらいかがか。

吉田会長：そういったPR活動はしているのか。

事務局（若菜）：新井氏の写真は、企画展の取材を受け、新聞記事となった。加藤氏の資料は、まだ受け入れが終わったところだが、これまでも古いパンフレットや絵葉書などを展示で使っており、更に活用できればと思う。それを展示でどう使っていくかは改めて検討したいが、その中で寄贈されたことをPRしていきたい。

野村副会長：寄贈者も市が感謝していることが記事になれば喜ぶと思う。ぜひPRは行ってほしいし、編さん便りの中にすこしでも入れた方がいいのではないかな。

白井委員：あるいは、こういったパンフレットの形でも多くの人に見てもらえる。所蔵者もこうしたものがあれば記録としても喜ばれるのではないかな。

事務局（倉田）：野村副会長のお話からマスメディアを使つてのPRが考えられるが、その方面との付き合い方がわからず、どうしても展示などの時に一緒に話をするぐらいしかない。その辺の意識を変えて、違う形でも情報を伝えていこうと思う。

野村副会長：マスコミは情報に飢えているのだから、提供すればいくらでも書くと思う。特に、こうした膨大で貴重な資料が寄贈されるのは有り難いことなので、ぜひ日頃来る記者にでもそうした情報を提供してみしてほしい。

吉田会長：『史料編近現代』の予算が付かなかったことも情報になるのではないか。

野村副会長：そうして窮状を訴えてみてもいい。

吉田会長：博物館では、以前から古写真や映像資料等は系統立てて収集しているのか。

事務局（若菜）：系統立てた収集は行っていない。情報があった際にいただけてくることが多い。

吉田会長：紙媒体の史料と違って、保存の問題など特殊なのだから、系統的に収集する必要がある。市史編さんというより博物館の問題かもしれないが、貴重なものでもあるし、写真や映像資料をかなり意識的にコレクションを作っていくことも大切なのではないか。他に関連して何か意見があればお願いしたい。千葉大学の件は、大学史の資料室のようなものができているのか。沿革史料というのは教育学部で持っているのか。

事務局（大関）：教育学部沿革史を作ったときの史料を持っている。学内で帰属がはっきりしない状態で保管していたようで、現在は教育学部で保管することになったようだ。大学史の資料室ができるわけではない。今回は大学の改修時に史料が温湿度の管理ができない部屋に移動されたため、今後その状態が続くのなら郷土博物館で保管できないか、という話だった。結局、場所はそのままだが温湿度の状態がある程度一定になるようにし、棚を入れて配架できるようにし、教育学部で保管することになったと聞いている。

今井委員：写真の保存の話に関連して、新井氏の写真は寄贈されたのか。かつて『千葉いまむかし』に紹介した以外のものだと思うが、ここではネガを借用とある。ネガも寄贈されるということなのか。

事務局（築瀬）：ネガを寄贈していただくということである。

今井委員：同様にマイクロフィルムの保管はどうなっているのか心配している。現在は保管庫に入っていると思うが、全体的には大丈夫なのか。昭和50年以前からやっているのだから、30～40年近く経っているものもあり、フィルムが劣化している恐れがある。巻き直しなどの作業にボランティアを活用できないのか。

事務局（築瀬）：ドライキャビネットに入れてある。巻き直した方がいいという話は聞いてはいる。検討する。

野村副会長：新井氏の写真は非常に程度が良いが、ネガも退化するのでデジタルコピーした方がよいのではないか。

事務局（築瀬）：全てデジタル化してある。

吉田会長：他に無ければ、次に刊行事業と普及事業を併せて議論したい。前回の編さん会議の資料と比べると、『千葉いまむかし』24号の内容構成案といくつか変更があるようだ。こうしたことは、編集委員会の判断で変更しているのか。

事務局（築瀬）：原案を事務局が作成し、編集委員会に承諾を得ている。

吉田会長：当初の構成案には入っていないものを、掲載する場合の判断のプロセスはどうなっているのか。

事務局（築瀬）：事務局で判断し、編集委員会の承諾を得ている。

吉田会長：以前も言ったが『千葉いまむかし』の編集体制に問題があるのではないか。

白井委員：初級古文書講座のところにボランティアが補講したとあるが、どういった形で行ったのか。

事務局（築瀬）：用意したテキストで終わらなかった分を読み進めていただいた。今年度はボランティア側の要望もあり前期終了後に1回のみ行ったが、昨年度は3回程度行った。

白井委員：受講者の評判が良いようなので、これを増やしたり継続的に行うことはできないのか。それによって講師の回数を減らせれば、講座の回数自体を増やすことができるのではないか。例えば5回のところを講師の行う回数を減らし、ボランティアの方の補講を少し増やせば、もう一つ講座を作れるのではないか。

事務局（築瀬）：以前は一部嘱託職員にやらせていたが、現在ではその分予算要求して全てを講師にお願いしている。現状ではこれ以上増やすのは難しい。

吉田会長：増やすのが難しいという判断は金銭面で難しいのか。白井委員が提案しているのは予算の部分は変えずに回数を増やせないかということなので、それでは答えになっていない。ボランティアではだめだということなら答えになるが。

事務局（築瀬）：ボランティアの実力では、講師の講義と同等というわけにはいかない。その場合、結局は受講者の不利益になると思う。

吉田会長：大関はどう考えるか。

事務局（大関）：ボランティアのモチベーション次第と考える。協力員の希望を内々に聞くと、自分たちが教えることに不安があるとのことだった。教えたいと思う方が複数いれば実現可能性はゼロではないが、少人数では負担が集中してしまう。それをカバーできる体制がこちらで整っていないと難しいと思う。

白井委員：ボランティアをしているのは中級古文書講座を修了された方なのか。

事務局（築瀬）：中級が終わって、以前開講していた上級を終了した方が中心である。

白井委員：上級もあるのか。

事務局（築瀬）：一時期開講していた。

白井委員：中級修了者で今後も続けたいという意見があるようなので、体制を整えてはいかがか。古文書に触れる機会にもなる。続けたいという方がいるならば、そうした方たちがボランティアとして活動できる体制もとれるのではないか。

事務局（倉田）：それは、講座でなくてもよいということか。講座室を古文書に触れる場として提供できればよいということになるか。

白井委員：もし希望があれば、そうしたことをしてもよいのではと思った。勉強会のような形でもよいが、そうすればその中からまたボランティアとして協力いただける方も出てくるのではないだろうか。

吉田会長：やはり方向としては、ゼミのようなことをするのが良いと思う。古文書がある程度読めるようになると、ただ読むだけではなく、やりたいことが多様に発

展してくる。そうしたことを郷土博物館や市史編さん担当でストックしているような写真資料や原文書などを扱いながら、自分でも何かを調べたり発見したりするという方向にいけば、重要な飛躍になっていく。そのプロセスの中で、ボランティアの方たちと一緒に資料集を作っても良い。そうして市民の方が歴史の勉強をする喜びを得られる方向に向かうといいと思う。カルチャーセンターなどもそうだが、入り口だけなところが多い。予算の問題があって難しいのだろうが。

事務局（倉田）：スペースと担当職員の負担の問題があるとは思いますが、場所の調整は可能だろうと思う。

本郷委員：古文書ボランティアという方たちがそれにあたるのではないか。年に40回ということは、ほぼ毎週活動していると思うのだが。今は何人くらいいるのか。

事務局（築瀬）：現在は10名である。

吉田会長：その方々が勉強する場はなく、作業をしてもらうだけなのか。

事務局（大関）：午後から学習会をしていただいている。

本郷委員：その方たちは徐々に増えていくのか。中級修了者がそこに入るのか。

事務局（大関）：当初、古文書の整理作業をして欲しいということをお願いした。そのため上級コースを設定し、整理作業を学んでもらった。そこから希望者にボランティアをお願いしている。現状では上級コースを受けたか、もしくはその方の知り合いで入った方はいるが、整理作業を前提として募集している。あくまで個人的な意見だが、中級修了者が突然入って同じように整理ができるかということ、ちょっと難しいと思う。少なくとも午前中の整理作業への参加は難しいかと思う。学習会の方にだけ参加したいということになると、ボランティアなのかどうか不明瞭になるかと思う。

吉田会長：学習会というのは何をしているのか。

事務局（大関）：現在はこちらから何か課題を出しているわけではなく、整理作業の途中で参加者が興味を持った史料を数点選んで、全員で輪読したり関連した事項について調べたりしていた。

吉田会長：結局ゼミということになる。そういうことがすごく大事だと思う。

本郷委員：せっかく初級・中級で多くの受講生がいるのだから、もう少しスムーズにボランティアに流れていくようにできるといいと思う。

野村副会長：『千葉いまむかし』バックナンバーのPDF化という事業をしたと報告があった。進度が相当遅いと思うが、PDFにするのにはそんなに時間がかかるのか。

事務局（大関）：時間の融通ができなかっただけで、作業自体はさほど大変ではない。

野村副会長：新聞記事のデータベースボランティアもあるが、これこそボランティアの方をお願いした方が迅速にできると思う。ぜひ検討してほしい。

吉田会長：議論が先に進んでいるが、普及事業について他に何かあるか。

野村副会長：研究講座の講師を集めるのに苦労しているのではないか。

事務局（築瀬）：千葉市に限定するので、なかなか見つからない。

野村副会長：講座のアンケートを見ると、中世に興味を持っている方がかなりいる。

せっかくアンケートを取っているのだから、要望にできる限り答えてほしい。

吉田会長：一回目は中世で行ったので、中世に興味を持っている方が多くなっている

ところもあるかと思う。ただ、せっかくアンケートを取っているのだから、この結果から何を教訓として次に活かすかということを考えるべきである。内容や講師の案などはこうしたところをベースに企画を作っていく方が良い。研究事業については、「江戸と千葉」研究会をやっているが、参加してみてもどうか。

白井委員：この研究会の周知はどういった形で行っているのか。せっかくやっているのでPRをして、もっと興味がある方が参加できるといい。いつも10名程度なので、せっかくならもう少しPRをした方がよい。一般の方が参加してもいいのか。

吉田会長：どうPRしているのか。

事務局（倉田）：強いPRはしていない。内部だけである。

今井委員：市史研究会もそうだと思う。今年度の二回目はたまたま案内があったので驚いた。「江戸と千葉」研究会の場合もそうだが、どちらにしても今のところ囲い込まれた形でやっているのではないか。

吉田会長：囲い込まれた人間と何となくコネで知った人間が来ている。

今井委員：特に市史研究会については館でやっていることが周知されていないと思う。

「江戸と千葉」研究会がそうであるならば、市史研究会もこの講座室を使えるだけ使ってもよいのではないか。ただそうすると準備の問題があるが。

吉田会長：HPには載るのか。

事務局（倉田）：載せていない。HPをうまく使っていければとは思っている。ただ、その場合応募に対してどう対応していくのか、事務的な手続が増えると考えられるので、実際には内々になってしまっている。また、どちらも報告内容が一定の評価に達していない部分もあり、それをそのまま一般の方に伝えていいのかどうか疑問が残る。そうすると簡単に外に出せないというようにも考えている。

吉田会長：そうした内と外という峻別なのだが、市史編さん関係や博物館関係を「内」とするのか。いまのところ「江戸と千葉」研究会について言えば、研究会なので講演とは少し違うが、千葉市域を含めて周辺地域の研究に関心を持っている人たちには開かれている。その意味では「内」の範囲はもう少し広いと思うのだが。

事務局（倉田）：HPに載せるともっとオープンな形になってしまう。

吉田会長：内容が難しすぎるなどの判断は参加する方がなさることだろうと思う。ただ、HPで募集をしても、そこまで大量に応募があるとも思えない。卒論を書こうと思っている学生やリタイアした大学の先生などが参加されてもいい。

本郷委員：歴史に関心がある高校生が参加してもいい。

吉田会長：こうしたことについてもぜひ検討してほしい。今後の事業予定にも絡んだ話になっているので、議題2に移る。

議題2 今後の事業予定について

平成23年度の主な事業計画と今後計画している刊行物についての概要を説明したうえで、『千葉市史史料編 近現代』『歴史読本』の進め方等を若菜係長より説明した。

<質疑応答>

吉田会長：それでは、事業計画と刊行計画の二つに分けて議論したいと思う。まず事

業計画についてはいかがか。市史研究講座の企画についてだが、近現代と中世以外の時期は取り上げないのか。

事務局（築瀬）：今回は第一回・第二回については今年市制 90 周年ということで、近現代の特集とした。第三回は中世で現在予定している。第一回・第二回とも講師は編集委員の先生方をお願いしようと考えている。

吉田会長：そこまで考えているなら、案に書くべきではないのか。日にちと枠しか書いていない。事業計画の具体案がある程度念頭にあるなら、提示すべきだと思う。

事務局（築瀬）：まだ未確定であったので載せなかった。

吉田会長：例えば、「江戸と千葉」研究会をやってきているので、その成果を踏まえた市民向けの講座を、来年度なら三回のうち一回はやらせていただけないかと思う。中世が多いのは要望が多いからか。中世と近世を組み合わせるなども考えられるが。市制 90 周年記念だとしても、近現代だけに限定する必要はなく、多様なテーマでやる方がむしろ市民のニーズからいえばふさわしいと考えられる。

事務局（築瀬）：現在の市史の仕事は近現代がメインであるので、近現代に光をあてたいという担当の希望もある。

吉田会長：刊行計画では近現代に重点があるが、市史編さん事業全体からいえば近現代に重点を置くということにはなっていない。それは少なくとも編さん会議では了解されていない。

白井委員：昨年度の研究講座では第一回に比べて第二回の近現代は応募者も 200 名に達せず少ない。市民が希望するような講座を入れた方が良いのではないか。

事務局（若菜）：確かに昨年度は近現代の方が少ない。ただ、これまでの市史研究講座では近現代の講座になった時に受講者が二桁になってしまうこともあった。それに比べて昨年度の場合は、テーマが良かったこともあると思うが、当日の参加者は少ないにせよ 178 名の応募があった。企画としては成功したと思う。

今井委員：それは恐らくビゴーの影響だと思う。

事務局（若菜）：つまり、魅力的なテーマであれば近現代でも参加者は集まると思う。そうした意図も含めて担当では今まであまり受講者が多くなかった近現代にもう少し力を入れてみたいというように考え、企画した。偏っているのは確かであるが、そうした意図も含めての企画であることを汲んでいただければと思う。

吉田会長：以前から言っていることだが、研究講座の内容や講師選定は事務局中心でやらざるを得ないのだろうが、例えば編さん会議で出されるような意見は反映できないのか。具体的な交渉をもうしているのか。

事務局（築瀬）：既に交渉をしている。

吉田会長：我々の意見を取り入れながら企画を立てるべきではないのかということとは当初から言ってきた。このことについては、一端できかかったのに元に戻った感がある。近現代を重視することが事務局の考え方であるならば、既に決まったことを出すのではなく、むしろそういう問題の立て方で講座をすることが妥当であるかを編さん会議かあるいは編集委員会で提案する形で議論すべきである。

事務局（倉田）：会長の言はもっともだが、我々としては日程や会場を設定する都合上、テーマや先生方の都合を調整すると、どうしても結果的に後付けの説明にな

らざるを得ない。今回も既に講師の先生方にお話をして進めてしまっている。

吉田会長：以前は年度が始まってから5月か6月の会議の場で今年度の研究講座の内容について話があった。それはおかしいということで、もっと白紙の段階で、編さん会議の意見を踏まえて企画を立てるべきだと言って、積み重ねてきたつもりでいる。今まだそういう意味では来年度のことなので、すべて内容が埋まっても、今日の議論を踏まえて講師の選定を含め企画を十分議する時間的余裕はあるはずだ。逆にある程度詰めてあるならばここで明示すべきだ。

事務局（築瀬）：研究講座の講師は、一回目は編集委員会の三浦委員長・中澤委員、二回目は神山委員・小林委員にお願いしたいと思っており、この二回をまとめて一回の募集で参加者を集めたい。三回目は市川市の博物館で中世を担当している湯浅氏、千葉大学の博士課程にいる石橋氏に中世の千葉に関する話をさせていただきたいとお願いしている。

事務局（倉田）：先生方のスケジュールも押さえる形で話を進めている。

吉田会長：事実上事後承諾せよということか。神山氏は二年連続での講演になる。

事務局（築瀬）：神山委員は、二年連続でシリーズのような形をお願いしている。

吉田会長：あくまで議案なので、この場で研究講座の企画を認めないということも考えられるが、どうなるのか。

事務局（築瀬）：今回の編さん会議をもとに来年度の講座の内容を決めていると、講師の依頼などは時間的に厳しい。

吉田会長：そんなことはないはずだ。

野村副会長：23年度の事業計画なのだから、できればこの時点で案があるのなら事前に提示した方がよい。これだけ追認する形が多いと、編さん会議はそもそも何なのかという疑問がわく。せつかく委員の先生方が揃っているのだから、もっとどんどん提言をしていくべきではないか。年に一、二回会議をするだけで、議題も毎回ほぼ変わっていない。編さん会議の存在意義をもうすこし考えてみてほしい。

吉田会長：前任者の時にも、今回のように知らない間に事務局でセットして決めていくという決め方はではなく、編さん会議の意見をどう反映していくのかなどを考えて、議論する時期など多少改善されたはずだった。年明けの今頃に議論すれば間に合うということで、この時期に会議を設定するようになったはずだ。第一回の編さん会議では、翌年度の講座は議題に上がっていなかったのだから、今議論しなければ意見を言う場が無い。もし案があるのなら、それを出して編さん会議の了承を得たいと提案すべきである。今回のように議案が日程以外白紙であれば、我々は自由に提案するのが当然である。今回はもう依頼しているので了解せざるを得ないが、来年度以降は本来あるべき形にしてもらいたい。

事務局（倉田）：担当の方は早く決めてしまいたいということで先走った感はある。今回については講師の先生方をお願いしてしまったので、次年度以降はこの時期の編さん会議での意見を反映して企画する方向に戻したい。ただ今後も、日程が早いものについてはある程度事後承諾にならざるを得ない。2回目・3回目については先生方の意見を入れていきたい。先生方の意見を求める時期としては、やはりこの時期が妥当であるので、この時期の会議で次年度の予定についての議論

をお願いしたいと思う。

吉田会長：今回については事後承諾になるが、了解せよということか。24年度の1回目についても、事後承諾になるかもしれないということだが、それならば24年度研究講座1回目の内容は、23年度第一回の会議で話し合えば良いのではないか。

事務局（倉田）：会場を押さえる都合があるので、それが可能かどうかは疑問である。

吉田会長：日程などの細かいことではなく、23年度第一回の編さん会議の場で、翌年の研究講座をどういったものにするのかということを経験して、講師や内容などを考えていけばよいのではないか。

事務局（倉田）：議題の最後に入れる形であれば可能だと思う。その方向で考えたい。

吉田会長：続いて刊行計画についての議論に移りたい。

野村副会長：歴史読本は予算要求をしているとの話だが、見通しはどうか。

事務局（倉田）：厳しいと言わざるを得ない。去年の終わりに少し話があって、一度予算がつくかもしれないということもあった。まだ予算が確定してはいないためお話しすることはできないが、こちらも厳しいと思う。

野村副会長：新年度に着手できないなら、歴史読本はいつできるのか。目標が無く内容を議論せよと言われても熱が入らない。5年近く話してきた内容なので、検討する価値が見い出せない。せいぜいA5版で100ページでこれだけの内容が収まるのかという話くらいしかできない。アンケートでも購入したいという人が70%くらいおり、刊行の目的にもあるように市民が待ち望んでいるのなら、市制90周年に合わせるとかして、もう少し早くできないのか。千葉市の財政状態では無理なら、事務局ベースで自費出版のような形でも出せるのでは。千葉市のやさしい歴史本が無く、市民の関心が高いのだから、出せば相当市民が購入してくれると思う。スポーツ振興財団や文化振興財団などは、広告をとったり、業者が代わって作る例が非常に多い。そうならば、歴史読本も広告ページをつくってもいい。オールカラーでも、印刷費であれば400~500万あればできそうな話である。その中に20ページ広告があっても、そこも含めて将来歴史的に価値があるのではないか。コンペをして業者を募ってもよい。刊行物は3000部売れば利益が出るが、アンケート結果を見るとそれ以上売れるように思う。配本する分がどの程度あるのかはわからないが、それ以上売れば業者も利益が出るはずだから、事前に調査してみたいか。そうしないといつまでも出来ない気がする。そうした本を代わって作る業者は幾つもあるのだから、市の広報課でも調べて可能性を探るべきである。資料と文章さえあれば、業者は作ることが可能であるし、広告をとってくれる出版社もたくさんある。市政だよりでも広告は載っていて、いかに予算を節約するかという方向になっているのだから、そうしたことを考える必要がある。このままではこちらも熱が入らないので、そういった努力をしてほしい。

事務局（倉田）：しかし原稿料についても確保が難しい状態である。そこをクリアできれば次に進むと思うが、今は全体的に財政が苦しい状態なので難しい。たまたま去年そういった話があったので、予算要求をさせていただいたが、それも難しいということに現在なっている。予算が付けばその年度で刊行をとってはいくので、それを考えると、体制だけは整えておきたいと考えている。

野村副会長：ソフト料金としては、現時点でどの程度と見ているのか。

事務局（築瀬）：300万くらいと考える。

野村副会長：三浦委員長に伺いたいのだが、そもそも、この内容はA5版100ページ前後で収まるものなのか。

三浦委員長：わからない。

野村副会長：本当にこれで図版や写真が入って収まるのか。地図や写真資料など丁寧に解説するとあるが、一項目5ページでは相当文章を簡潔に書かざるを得ないと思うが。

吉田会長：年末に予算請求したため、今回このような企画書を出したという話だが、詳しくはどういったことなのか。

事務局（倉田）：年末に予算要求時に若干の枠が使えるという話が出た。23年度の全体の枠の中で動きが取れそうな話であったので、部長も含めて検討していこうという話になった。そのため、編集委員会でもお話しした。

野村副会長：予算はずっと要求しているはずだが。

事務局（倉田）：予算の枠が臨時と経常の二つある。これまでは臨時で要求していたが、予算の枠組みが変わり経常の枠が使えるのではないかとということで、こちらに組み入れて要求した。結果としては思わしくない状況である。我々は、上も含めて予算が確保できればやりたいと強く考えているので、今回のスケジュールの中にも入れさせていただいた。

吉田会長：プロジェクトチームというのは、ある程度具体的に念頭にあるのか。

事務局（倉田）：具体的な名前は出せないが、念頭にはある。

吉田会長：万一予算が通ったとしたら、来年度に出すということか。万一の為に事前に原稿を書くなど誰もしないと思うが。

本郷委員：前にもその話はしたと思う。本来は単年度で切ってプロジェクトチームを作ることから始めるのは現実的ではない。

事務局（倉田）：我々としても臨時予算の中で要求し、原稿執筆の時間などをとった方がいいとは思っているのだが、なかなかうまくはいかない。

野村副会長：予算を要求するときにも、もっとタイトルを工夫したりする必要があるのではないか。もっとやさしくわかりやすいものに変えとか、90周年記念を入れるとかした方がいいのではないか。

吉田会長：以前に体裁や構成などここでずいぶん議論をしたことが部分的には含まれてはいるが、全体としてはあまり反映されていないのではないか。

野村副会長：とにかく、いつまでに作るのかがないと真剣には取り組み難い。市史編さんの先生方に書いてもらったとして、執筆料・印刷代も含めて先に提示した額で受ける会社は可能性としてはあると思う。市の広報などはわかると思うので、問い合わせて相談されてみてはどうか。

吉田会長：個人的には多少ボランティア的に、市史編さんの枠を無視しても作ってしまえという気もするが、ここにおられる先生方を含め有志を募って、市内の出版社にお願いして作ってもよいのではないか。先ほど野村副会長がおっしゃった広告を入れていくのも方法の一つだと思う。では、議題3に移るが、何かあるか。

議題3 その他

<質疑応答>

野村副会長：個人的な提言だが、千葉市の歴史をできるだけ多くの人に興味を持っていただくということで、大人の社会見学のようなものを計画されてはどうか。そうすれば古文書講座など専門的なことだけでなく、市史に興味を持ってもらえる人の裾野を広げていけるのでは。ハイキング兼歴史散歩のような感じで、公共の交通機関を使えば予算が少なくともできると思う。今は旅行会社などでもそうした企画が流行っている。試しに90周年記念事業で一度ぐらいやってみてはいかがか。学術的なことだけでなく、広く一般の市民に興味をもっていただく取り組みが必要なのではないか。

吉田会長：編さん会議主催でもよい。

事務局（倉田）：千葉市もかなりいろいろな組織でそうした取り組みはやっている。

それをもう少しうまく使えればと思う。

野村副会長：市史編さん担当独自で、他にやってないものをやったらよいのではないか。ぜひ検討してほしい。

殿塚副館長の進行により平成22年度第2回千葉市史編さん会議を終了。

問い合わせ先 千葉市立郷土博物館市史編さん担当
TEL 043-222-8231